

立山カルデラ内の水谷平に泊まり込み

全員一丸となつて砂防工事を支える

立山カルデラで砂防工事が行える約5カ月間、水谷出張所の職員や建設会社の作業員は週末以外泊まり込み、さらに職員や作業員の生活を支える賄いさんや救急所には看護師も常駐しています。過酷な砂防工事を支える人々を紹介します。

鷲山崩落土の台地の上に 夏の間だけ出現する小さな村

水谷出張所がある水谷平は、立山駅から車で2時間ほど登った立山カルデラの西の外れにあります。安政5年（1858年）の飛越地震で崩落した土砂が堆積してできた平坦地です。出張所は、昭和35年（1960年）に開設して以降、立山カルデラの砂防工事の前線基地として機能してきました。

砂防工事専用軌道のホームに面して鉄筋コンク



水谷平全景。奥にある水谷出張所から延びるレールは砂防工事専用軌道（トロッコ）の線路。写真手前には各建設事業者の宿舎が並ぶ。



水谷平北側の斜面にはここでしか見られない滝が。水谷平にはこの滝のほかに雨量が多くなると出現する滝もある。出現する滝の本数で山の雨量を判断することもあるそう。この上部が立山黒部アルペンルート（みづがほら）の弥陀ヶ原辺り。

13事業者が工事に参加 200人ほどが共同生活

本年度は13事業者が参加し、15カ所の砂防工事に取り組んでいます。13ページで紹介した「湯川第13号砂防堰堤工事」を担当する丸新志鷹建設株式会社もその一つです。現場代理人の佐伯靖さんは「天候や工事の進捗状況により、目まぐるしく変わる現場に対応することが、砂防工事の難しさです」と語り、監理技術者の藤本一行さんも「現場の変化や不具合は常に国土交通省さんと情報共有し、適正で迅速な工事遂行を心掛けています」と連携

している。また、15ページで紹介した「有峰下流左岸山腹工事」に従事するのは新栄建設株式会社です。監理技術者の唐島田幸治さんは「ロープで斜面を下りながら施工するハードな仕事ですが、立山カルデラの生態系に配慮した工法に誇りを持って取り組んでいます」と語り、現場代理人の北村涉さんも「機械や施工法が進化しても最後の要は人であり、もっと多くの人と仕事がしたいです」と語ります。

工事の効率化や機械化が進み、現在の作業員は最盛期より減っています。それでもお盆明けのピーク時には約200人が水谷平で生活し、一丸となって工事に取り組んでいます。

丸新志鷹建設株式会社



佐伯 靖さん

藤本 一行さん

の大切さを強調します。同社からは十数名が従事し、海外からの技術実習生も3名が参



ネパールからの技術実習生
アディカリ ミンマ ヌルさん



（左から）新栄建設株式会社
唐島田 幸治さんと北村 涉さん

砂防工事を支える人々



水谷寮の食事は、職員や賄いさん、看護師もみんな一緒に

**限られた食材でやりくりし
職員や作業員を家族同然に支える**

こうした作業員の生活を支えるのが、各建設事業者の宿舎で働く賄いさんたちです。丸新志鷹建設株式会社の賄いさんは、今年で29年目

の佃トシさん。「初めて来た時は、あまりの寂しさに逃げようと思った」という1年目から今日に至るまで、毎朝3時に起床し朝食と昼の弁当づくり、掃除や洗濯の後に夕食の支度と目まぐるしく過ごしています。「作業員さんたちは子どもや孫みたいなもの。つい食事のマナーを注意したりね」と佃さんは笑います。



佃トシさん

一方、国土交通省職員が寝泊まりする水谷寮の賄いを切り盛りするのは、山口スミ子さんと柿木浩子さんと。限られた食材で総勢10名の好き嫌いやアレルギーなどに配慮し、朝昼夜に「力になる料理」を振る舞います。ポリウムのある丼物が人気である



(左から) 柿木 浩子さんと山口 スミ子さん

**不便ながらも大自然と共存した
居心地の良い生活**

木さん、テレビを見てのんびりしたり(山口さん)するなどをしみとしながら「みんな家族」という気持ちで支えています。

立山カルデラでの砂防工事を支える人々の癒やしの場といえば「天涯の湯」と名付けられたお風呂。上流約1kmの源泉から豊富な湯量が引かれ、男女用とも大きな岩組みの浴槽で野趣満点! また、昔は公衆電話が1台だけだった通信環境は、現在は立山カルデラ内のほとんどのエリアで携帯電話が通じるなど、大幅に改善しました。水合平で

り、木曜日の夜は刺身、金曜日の昼はカレーライスが定番料理として食卓に並びます。他にも掃除や洗濯なども担い、せわしい毎日ですが、孫と每晚のように連絡したり(柿



砂防工事で働く人々の疲れを癒やす「天涯の湯」

使用する洗浄剤は自然分解性の高いものであり、浄化槽やバイオ式生ゴミ処理機の設置など、環境への配慮がされています。それでも多少の不便は否めなものの、大自然の眺望と美しい空気や水、大家族のような居心地の良さもあってか、下山時は「水合平での生活が終わってしまっ」というちょっとした寂しい気持ちになるそうです。

**遠隔診療も可能な救急所が
いざという時のよりどころ**

山の仕事は健康管理が必須であり、急病や作業時でのけがの危険もあることから、医療施設として水谷救急所が設けられています。平成11年より開始された月3回の医師の往診に加えて、平成13年から導入された遠隔医療支援装置による医師の診断・問診が受けられます。常駐看護師の宮本美枝さんは前任者の紹介で赴任し、今年で14年目。開所以来、防災ヘリコプターによる緊急搬送が2回あったものの、平時は来診者も少なく、あつても持病の薬の処方や簡単なケガの手当程度となっています。美しい空気のもと喘息は軽減し、風邪も流行しないそうです。「救急所は忙しいのが一番ですが、いざという時に備えています。全員が無事に下山できるようにと願っています」(宮本さん)。



看護師の宮本 美枝さん